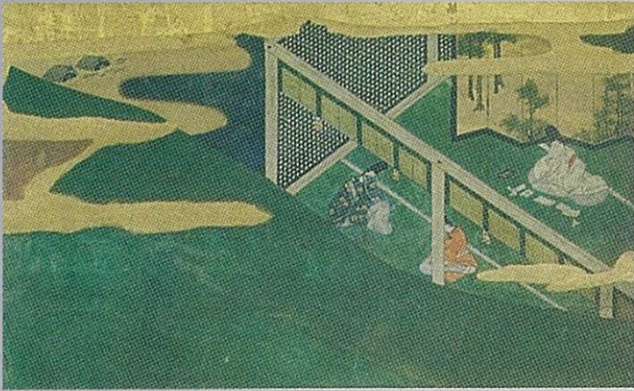


「潤一郎あれこれ」

館蔵「源氏物語屏風切」

— 芦屋の侘び住いと「谷崎源氏」の絢爛 —



俵屋宗達「源氏物語屏風切」(谷崎記念館所蔵)

昭和9(1934)年、人妻だった根津松子との恋を实らせた谷崎は、彼女とともに芦屋打出の家(現芦屋市宮川町4丁目)に移る。「姦通罪」というもののあった時代、世間をはばかり二人の隠れ家である。この頃の谷崎は、作家生活のなかでも、もっとも貧しい時期のなかにあった。この家で書かれ、やはり芦屋を舞台とした「猫と庄造と二人のおんな」は、そんな暮しぶりのせいでもあるのか、谷崎にはめずらしい庶民的な生活感にあふれた作品である。

一方、その貧窮のなかで、源氏物語の口語訳「谷崎源氏」の執筆が始まる。

この家には、松子のみならず、その姉妹、娘をも呼び寄せた。部屋ごとに彼女たちを住ませ、折にふれては訪れる谷崎。さながら、美女たちを愛(め)でまわる光源氏の境地だったか。

そんな谷崎の書齋に掛けられていたのが、この「源氏物語屏風切」である。「屏風切」とは聞き馴れないが、源氏物語54帖の各場面が描き込められた屏風から切り取られ、画軸に仕立てたところから名づけられた。日本画の大家・安田靉彦が筆をとった箱書きの由緒によると、団家(血盟団事件で暗殺された戦前の実業家団琢磨の家)旧蔵の屏風の一部だった。俵屋宗達の手になるこの大和絵の名品は、高価な顔料であった緑青や金泥をふんだんに使った贅沢なつくり。場面は「須磨」で、切り離された散り散りの54帖のうち、所在の明らかになっている20余帖のなかの一つである。

源氏絵の絢爛は、侘び住いを彩った女たちともども、谷崎源氏の執筆をささえた道具立てでもあったのだろう。

(芦屋市谷崎潤一郎記念館井上勝博)

※「源氏物語屏風切」は2020年春の特別展に出品されます。

※谷崎が暮らした「芦屋打出の家」は、芦屋ゆかりの詩人・富田碎花の旧居で、今は無料公開されています。

(日・水曜の10~16時開館。入館は15時まで)



谷崎が住んだ芦屋打出の家
(現「富田碎花旧居」)

谷崎記念館だより 2019

2020年3月31日発行(初版第1刷)

発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館

〒659-0052 芦屋市伊勢町12-15

Tel 0797-23-5852 fax 0797-38-3244

HP: <https://www.tanizakikan.com/>

